

【表現学関連分野の研究動向】

日本語文法(史的研究)

米田 達郎

今期も様々な観点に立った研究成果が発表された。特にCHJ(日本語歴史コーパス)を用いた日本語史研究は盛んに行われている。20年前と用例を検討することに異なりはないものの、用例を収集する時間が極めて短く、良い意味で研究成果を出しやすくなっている。

『データに基づく日本語のモダリティ研究』(くろしお出版)所収の小木曾智信氏「通時コーパスに見るモダリティ形式の変遷」では、CHJに収録されている各時代を代表する文献で使用される助動詞ム・ベシ・ラムなどを調査している。古代では多用されていた形式が、近世・近代になると助動詞ム・ベシに収斂されていくことを指摘する。このことは、古代語から近代語へとモダリティ形式の質的な変化を示しており、CHJが日本語史に貢献することを如実に示している。

また『シリーズコーパスで学ぶ日本語学 日本語の歴史』(朝倉書店)では、奈良時代から明治・大正時代までのCHJを利用し(時代区分については本書参照)、これまで見過ごされていた事実を指摘している。例えば市村太郎氏「江戸時代」では、洒落本で使用される断定の助動詞「だ」「じゃ」を取り上げ、上方版洒落本『阿蘭陀鏡』に、江戸語の特徴である「だ」の使用が認められることに着目している。その上で、「だ」の使用者が「聞きかじった『江戸なまり』を使用して通ぶっている登場人物という設定」(128頁)であるために、上方版洒落本で「だ」が使用されていることを指摘している。この指摘はCHJを利用することで新たに問題点を設定でき、明らかになったことである。

ただし、CHJを用いた研究結果は日本語史のすべてではない。特に近世・近代を対象にした場合、このことを意識する必要がある。CHJは、口頭語を反映した資料が大半を占める。そうでない資料から伺える表現も日本語史である。CHJを利用する功罪を知る必要性は、提供する側される側にとって高い。

文法史研究の成果を教育の場で活かす取り組みも期待される。富岡宏太氏「日本語学の活用方法—国語科教育のために—」(『群馬県立女子大学紀要』第41号)では、文法史を教育現場に反映させていくことが論じられている。ここにCHJを活用する方向性なども示されていても良かったのではないか。

田中草大氏「変体漢文の構文論的研究—受身文の旧主語表示を例に—」(『国語国文』第89巻第11号)では、『平安遺文』所収の変体漢文文書に見られる受身文について考察を加えている。ここでは「ニ」による旧主語表示は発達しておらず、「ノタメニ」が主に担っていたことなどを指摘する。田中氏は近世以降への影響も視野に入れており、今後発展が望まれる領域である。

『日本語文法史キーワード事典』(高山善行・青木博史編)は、各項目に用例が挙げられており、初学者に限らずわかりやすい内容である。持ち運び可能な点もありがたい。

上記研究以外にも、着実な研究の積み重ねが結実した論考が多数あった。敬意を表しておきたい。

(大阪工業大学)

【表現学関連分野の研究動向】

日本語文法(現代)

早津 恵美子

2000年に「日本語文法研究の進展と研究者の育成」(会則第2条)を目的として日本語文法学会が創立された。1963年創立の表現学会と違い若い学会だが、2020年9月刊行の学会誌『日本語文法』(20巻2号)において「創立20周年記念特集 日本語文法研究のこれから」が組まれた。20巻1号には初代会長仁田義雄氏による文章「日本語文法学会が創立された頃」があり、国語学会(現、日本語学会)とは別に日本語文法学会が創立された経緯が日本語研究の歴史や当時の状況とともに述べられている。国語ではなく個別言語のひとつとしての日本語を諸言語の個別言語学の成果に学んで研究する必要性の認識もこの学会の創立に向かわせたひとつだという。創刊号の投稿案内には、投稿原稿の分野として、現代語・古典語・方言の日本語文法及び関連領域(生成文法、認知言語学、日本語教育、文章・テキスト論等16種)とされており、文法を中心としつつも多様な領域の研究の交流の場となることが志向されていたことも窺える。この20年間の日本語文法研究は、上のいずれにおいても着実に進んでいる。

諸言語の個別研究との対照を試みた2020年の成果として、プラシャント・パルデシ・堀江薫編『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』(ひつじ書房)がある。日本語とアジア・アフリカの諸言語についての26編の論考によって連体修飾構造の多様な様相が示されており、日本語の分析に手がかりや新しい視点を与えてくれる。

研究領域の幅は上述の特集号の論文に窺える。上山あゆみ「これからの生成文法研究」は、20世紀に日本語についても盛んであった生成文法研究が現在やや勢いを失っているとしたうえで、その「遺産」を生かしつつ従来の意味論を超える方法論として氏の提唱する統語意味論を紹介する。機能語や動詞の項構造の記述において統語意味論の分析は興味深い。小西いずみ「終助詞が表す意味とはどのようなものか」は、終助詞を方言間で対照することにより、基本的意味と拡張的用法、認識の意味と伝達的特性(独話か対話か)の関係が探られる。共通語の終助詞や他の品詞の研究においても示唆的な観点である。前田直子「条件表現4形式使い分けルールの簡略化」は、「と、ば、たら、なら」の研究成果が日本語教育に必ずしも生かされていないとし、母語話者の作例とコーパス調査に基づいて各形式に特徴的な用法を見出して教育における簡略な説明を提案する。文法の研究と教育の交渉の重要性が実感される。宮地朝子「副助詞類の史的展開をどうみるか」では、中世以来の「体言」という捉え方を導入して副助詞ダケ等の文法変化を観察することによって、一般言語学でいわれる、語 word > 接語 clitic > 接辞 affix という方向とは異なる、接辞 > 接語という変化が見出され、一般言語学への貢献となっている。

現代日本語の・共通語の・文法の研究といっても、他言語や古典語や方言の研究、文法以外の領域の研究への目配りとそこからの学びを積み重ねてこそ豊かな実りがもたらされるのだろう。竹田晃子『東北方言における述部文法形式』(ひつじ書房)、池上嘉彦・山梨正明編『認知言語学 I』(ひつじ書房)もそれに気づかせてくれる。(名古屋外国語大学)

【表現学関連分野の研究動向】

日本文学研究(古典)

西山 秀人

2020年に発表された著書・論文の中から、とりわけ三代集時代の和歌表現に関するものを紹介していきたい。

今期の研究成果として特筆すべきは、室城秀之氏『和歌文学大系46 古今和歌六帖(下)』(明治書院)の刊行である。2018年既刊の上巻に続き、本書では第五帖・第六帖の歌に丁寧な脚注を施す。石塚龍磨の『校證古今歌六帖』に頼っていた稿者の学生時代からすれば、最新の成果を取り込んだ全歌注釈の完結はまさに隔世の感がある。現在注釈が進行している福田智子氏「出典未詳歌注釈稿」、古今和歌六帖輪読会(平野由紀子氏代表)「全注釈」の完成も期待したい。

久保木寿子氏『和泉式部の方法試論』(新典社)は、これまで等閑視されがちであった家集の群作歌に焦点をあて、和泉式部の多様な表現性を検証することで、その方法意識を明らかにする。勅撰集の陰に隠れた和歌史の「伏流」の系脈を探ろうとする姿勢は、前年刊行された武田早苗氏『平安中期和歌文学攷』(武蔵野書院)とも共通する。

勅撰集のみならず私家集や歌合にも目を配り、和歌表現の側から『源氏物語』の表現特性を明らかにしようとしたのが、瓦井裕子氏『王朝和歌史の中の源氏物語』(和泉書院)である。一条朝の和歌、とくに女房詠の表現傾向と『源氏物語』の叙述との接点を探り、新たな解釈を提示するという行き方は、今後の表現研究の一指標となろう。

高橋秀子氏「『うつつほ物語』の歌と安法法師の歌—出家者に関する和歌表現—」(『国語国文』89-2)は、『うつつほ』所載歌と河原院庵主、安法法師の歌には、出家という生き方に根ざした新しい和歌表現が用いられていることを指摘する。出家関連歌が新たなカテゴリーとして意識され始めた当時において、両者の歌は先駆的な存在であり、一般の社交詠とは一線を画しているという見解は、和歌史的にも興味深い。

これと間接的に関わる論考として、吉井祥氏「「和す」ということ—古代において返歌はいかに記されたか—」(『和歌文学研究』120)を挙げたい。平安和歌では「返し」といえば贈答歌だと理解されてきたが、実際には『万葉集』に見る「和する」歌、すなわち特定の誰かからの反応を期待せず、独立した歌に対して、後人が追和する詠み方も併存していることを手堅く考証。返歌に対する従来の理解に一石を投じる。

小橋龍人氏「「うゑしうゑば」考—古今集二六八番業平歌異文に関する一考察—」(『和歌文学研究』121)は、歌集中の異同はもとより諸資料、用字、語法に至るまで多角的な分析を施すことで、該句の原態が「うつしうゑば」であった可能性を提示する。本文異同の差異が和歌表現に与える影響の大きさを改めて痛感させられる。

藤原静香氏「曾禰好忠「毎月集」二番歌の一考察—海人への自己投影表現をめぐる—」(『女子大國文』167)は、当該歌が先行海人詠の表現を踏まえつつ、自らの不遇意識を諧謔的に誇張している点を指摘する。定数歌にみる虚構性の問題とも関わろう。

以上、不備や誤解が多々あることをご容赦いただきたい。(日本大学)

【表現学関連分野の研究動向】

日本文学研究(近代)

広瀬 正浩

今号は2020年1月～12月の研究動向を振り返るが、2020年はコロナウイルスの感染拡大に全世界が揺さぶられた1年だった(無論今も)。多くの人々が従来通りの生活や芸術文化の享受がままならないことに不安を感じ、政治に対して不満を感じ、そうした心情をSNSなどを通じて表現し、またそれを共有した。

SNSに投稿される情報は、受け手に対して直接的で共感性が高く、刺激の強いものが求められる。そして分かりやすさも好まれる。その結果、投稿された内容は、元々の文脈を読み取られずに脊髄反射的に受容される傾向がある。一見すると、高度なりテラシーが要求されるアイロニカルな表現が受け入れられない状況が出来しているようにも感じられるが、反面、メタな視点に立って他人の表現を嗤う者もきわめて多く、SNSはアイロニカルな表現に溢れている。木原善彦『アイロニーはなぜ伝わるのか?』(光文社、2020年1月)は、「アイロニー」を語源から掘りおこしながら、「期待」と「現実」の関係から表現を分類・整理しつつ、幾つかの文学作品を例示してアイロニーを説明している。

ところで、利用者の情動を喚起するSNS上の表現はそれを媒介とする共同性を生むが、そのような共同性はかつては雑誌の投稿欄に見いだされるものであった。秋吉大輔「制作空間としての詩—寺山修司による受験雑誌『高3コース』の文芸欄—」(『日本近代文学』第102集、日本近代文学会、2020年5月)は、1960年代に寺山修司が月刊受験雑誌の文芸欄に詩・俳句・短歌の選者として登場し、「書きたいことを書く」「肉声」を尊重して、投稿者に呼びかけていたことを指摘する。そして、その「肉声」志向が寺山の創作実践にも見られ、寺山の言う「詩人格」の涵養につながったと論じた。今日的な視点で捉えた場合、こうした「肉声」志向を、SNS上のアイロニカルな表現の充溢に対する反動として捉えることができるかもしれないが、「肉声」もアイロニーも、“読者のウケ”を狙ったものだという点では共通している。

SNSやYouTubeなど、誰もが発信者・表現者になり得る環境・技術が整っている現在、しかしそこでなされる表現は必ずしも独創的なものであるとは言えない。「肉声」も嗤い方も、様式化され類型的なものとなる。こうした状況について、歴史に学ぶことにも意義がある。湯本優希『ことばにうつす風景—近代日本の文章表現における美辞麗句集—』(水声社、2020年4月)は、句の形式の類型表現が題材別に列挙された美辞麗句集というもの明治時代に数多く刊行され、それが明治期の「作文」の流行を生んだことを、大町桂月や小島鳥水らの表現にも触れながら論じている。

「コロナ禍」の中、私たちの表現は改めて問い直される機会を迎えている。

(椋山女学園大学)

【表現学関連分野の研究動向】

国語科教育

松村 美奈

2020年は研究・教育の面においても、試行錯誤の1年間ではなかったか。今回は稿者の管見に入った国語教育における論考を簡単に紹介しておきたい。

全国大学国語教育学会による『国語科教育』第87集、第88集では、それぞれ戦前戦後の文法教育や綴方教育・国定高等小学校読本を取り上げるなど過去の教育から現在の教育へのアプローチを試みているものが目立った。この中から3点ほど「表現」に関わる論考を取り上げたい。まず、「言語感覚」というキーワードが目についたものとして、永田麻詠「国語科教育における多様な性への対応と言語感覚の育成」(第87集)がある。「社会言語学」の知見を手掛かりとして、多様な性への対応可能な言語感覚育成の必要性を述べ、国語科教育の取り組み方の可能性を示唆する。矢部玲子「言語感覚(適否)の修得状況を可視化する試み—学生対象の添削比較文選択実験結果分析に基づいて—」(第87集)では、言語感覚育成が客観的に測定しづらいことを踏まえ、「読点の打ち方」「句点の追加による長文の2文分割」の2点から大学生の修得状況を数値的に明らかにした。さらに言語感覚育成について「書くこと」以外でも指導可能であるとも指摘しており興味深い。酒井晴香、関玲「文末モダリティ表現に焦点を当てた大学生レポートの問題—コーパスを用いた実態調査より—」(第88集)では、大学生レポートの実態調査から精緻な分析を通してモダリティ重複表現の定型化きを浮かび上がらせている。こうした学生の表現実態に着目した調査分析研究は、今後国語科指導の面からも重要な意味をもたらすと思われる。

改訂された学習指導要領を参照すると「論理的思考」なるワードが飛び交い、「根拠を明らかにして説明する」という文言が点在する。これに懸念を抱き疑問を呈しているのが渡部洋一郎「主張表出における根拠と理由の相関—国語科教育での分類の実際と概念の本質—」(『表現研究』第111号)である。根拠と理由の概念区分の問題点を切り口に、トゥルミン・モデルを基軸に言及する。指導要領に刻まれる言葉がいかに曖昧な概念規定であるかを考えさせられる論考である。

次に『解釈』第66巻第5・6月号(国語教育特集)から紹介したい。加古有子「語句に着目した『お手紙』の読解—動詞の考察を中心に—」では、小学校低学年の定番教材である『お手紙』の中の「動詞」を抽出・分析し、語句・表現に着目した物語世界の理解の重要性を説く。

富岡宏太「日本語学の活用方法—国語科教育のために—」(『群馬県立女子大学紀要』41)では、「日本語研究の蓄積や手法が国語科教育にどのようにして貢献しうるか」と指摘し、解釈のための古典文法研究と位置づけ、興味深い授業提案も行う。こうした観点は、今後の日本語研究と国語教育(授業者)との関係性を見直す手がかりとなっていくと思われる。以上稿者の関心のおもむくまま学界動向を振り返った。取り上げるべき論考も紙幅の関係で紹介に至らなかったことをご了承願いたい。(愛知文教大学)

【表現学関連分野の研究動向】

日本語教育

加藤 恵梨

本誌の過去の日本語教育の研究動向においても幾度となく取り上げられている「やさしい日本語」は、日本に住む外国人の国籍の多様化とともに、情報発信の手段として活用されることが一層期待されている。2020年7月に閣議決定した「外国人材の受入れ・共生のための総合的対応策（令和2年度改訂）」では、「3 生活者としての外国人に対する支援」の項目において、「外国人向けの行政情報・生活情報の更なる内容の充実と、多言語・やさしい日本語化による情報提供・発信を進める」ことが明記されている。また、2020年8月には、共生社会実現に向けた「やさしい日本語」の活用を促進するため、出入国在留管理庁と文化庁が『在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン』を作成した。このガイドラインは、「国や地方公共団体が、お知らせなどの情報を作るときに、やさしい日本語を使って日本に住む外国人にもしっかりと情報が届くようになること」を目指して作られており、書き言葉で情報発信する際に活用されることが期待されている。そこでは「やさしい日本語」の作成に、「ステップ1：日本人にわかりやすい文章」→「ステップ2：外国人にもわかりやすい文章」→「ステップ3：わかりやすさの確認」という3つのステップが重要であると説明されている。

このような政府の「やさしい日本語」の普及に向けた活動にともない、日本語教育学界でも多くの取り組みがされている。2020年に出版された「やさしい日本語」に関する書籍には、庵功雄（編著）『「やさしい日本語」表現事典』（丸善出版、2020年7月）、吉開章『入門・やさしい日本語 外国人と日本語で話そう』（アスク出版、2020年8月）、岩田一成・柳田直美『「やさしい日本語」で伝わる！公務員のための外国人対応』（学陽書房、2020年10月）がある。庵（編著）は、PTA・保育園・行政・くらしなどの場面を想定した会話例と文章例をあげ、「やさしい日本語」に言い換え・書き換えるための技術について解説している。また、加藤好崇「インバウンドと『観光のためのやさしい日本語』」（『日本語学』vol.39-3、2020年9月）は、外国人旅行者とのコミュニケーション場面で用いる「観光のためのやさしい日本語」を提言している。

さらに、外国人を受け入れる日本社会側に向けての研修も行われている。日本語教育学会の2020年度秋季大会では、一般公開プログラムにおいて「受け入れ社会側へ働きかけるツールとしての『やさしい日本語』研修」と題し、役所、学校、医療分野において「やさしい日本語」の研修に関わっている実践家たちにより、実際に行っている研修内容が紹介された。このように、あまり共有されていない「やさしい日本語」の研修ノウハウを広めることにも力がそそがれている。

日本に住む外国人への情報発信の手段にとどまらず、多文化共生社会におけるコミュニケーション手段として、「やさしい日本語」が広く活用されることが期待される。

(大手前大学)

【表現学関連分野の研究動向】

英語学

赤楚 治之

2021年はEdward Sapir (1884-1939)の古典的名著*Language* (1921)が出版されてちょうど百年目にあたる。ある研究会でSapirの有名な句“All grammars leak”に言及したおり、フロアーから「漏れ」を積極的に認めるのが認知言語学であるというコメントがあり、言い得て妙だと感心したことがある。それに対し、「漏れ」ない部分だけに対象を絞り、文法理論を構築してきたのが生成文法であると言えよう。言語進化の問題(Darwinの問題)に軸足を移した生成文法(最小主義プログラム)は、言語機能に自然法則(第三要因)が如何に関与するかという問題に向かっている。根本的なところで全く異なった言語観に立脚するこれらの二大潮流は、敵対視の時期を経て、健全な言語研究を共通目的とし、お互いを認め合う「歩み寄り」を目指す努力が藤田耕司氏らによってなされてきたが、未だ、その接点を模索中であるというのが実情である。

このような理論研究の現状や英語の記述的研究のこれまでの成果が概観できるのが、*Oxford Handbook in Linguistics*シリーズの一巻として出版された[1]である。この便覧は、研究領域の「現在」を眺望するには絶好の書である。生成文法研究者としては、90年代半ばから生成文法の枠組みで、談話上の情報構造を統語構造の階層性として捉えることで、興味深い(記述的な)研究成果をおさめてきたカートグラフィー分析への言及がほばないという点が惜まれる。それを補うのが[2]と[3]である。ラジオ・テレビやインターネットなどから収集した口語データを用いて、カートグラフィー分析の記述面での有用性を検証したもので、非標準として扱われることの多い口語英語における変種(variation)にも、独自の体系性が在ることを教えてくれる読み応えある研究書である。(なお、*Relative Clauses*に関しては、この領域を代表する研究者のCinqueが[4]で興味深い仮説を提案している。)日本におけるカートグラフィーの第一人者である遠藤喜雄氏が前田雅子氏と共著で著した[5]はこの領域を研究する上での恰好の手引き書である。統語部門における新たな道具立てを活用するカートグラフィーは、言語進化の観点から統語構造を極限まで絞りこむ最小主義プログラムとは相いれないものだとする誤解が見受けられるが、それに対する著者たちの考え方を知ることができ興味深い。共感(empathy)の研究を軸に脳科学との接点が模索されているという。このような動向から、カートグラフィー研究が認知言語学と生成文法を結びつけるインターフェースとなり、ひいては表現研究に寄与できる可能性があると見てとるのは評者だけではないであろう。

[文献] [1] Aarts, B. et al. (2020) *The Oxford Handbook of English Grammar*. Oxford UP. [2] Radford, Andrew. (2018) *Colloquial English: Structure and Variation*. Cambridge UP. [3] Radford, Andrew. (2019) *Relative Clauses: Structure and Variation in Everyday English*. Cambridge UP. [4] Cinque, Guglielmo (2020) *The Syntax of Relative Clauses: A Unified Analysis*. Cambridge UP. [5] 遠藤喜雄・前田雅子(2020)『カートグラフィー』開拓社 (名古屋学院大学)

【表現学関連分野の研究動向】

認知言語学

大神 雄一郎

本稿は、2020年の認知言語学の研究に関し、表現学・表現論にも関わりを有すると思われる動向について論じる。2019年4月に発行された『表現研究』109号では、2018年の認知言語学の研究動向の1つとして、眞田敬介氏から「認知言語学の根本を整理し問い直す動き」が示された。そこから2年を経たところで、この動きを発展的に引き継ぐものとも思われる1つの動向として、ここでは「認知言語学の知見を総合的に活かす動き」に焦点を当て、この観点から3つの文献を紹介したい。

1つめに野村益寛『英文法の考え方 英語学習者のための認知英文法講義』（開拓社）を挙げる。同書は、英文法を「無味乾燥」な規則の体系としてではなく、「思い、すなわち意味を形にするための仕組み」として理解することの重要性を主張する立場から、認知言語学、特に認知文法の知見を総合的に用いて英文法が表す意味の体系性に迫るものである。辞書や文学作品からも引用される多くの例文を通じ、文法が表す意味、あるいは意味を形として実現する文法の姿についての見通しが得られる。

2つめには翔山洋介『実例で学ぶ認知意味論』（研究社）を挙げたい。同書は、現代日本語の身近な表現における意味の広がりや、意味と形式の特殊な結びつきに目を向け、認知意味論を中心とする認知言語学の発想を広く提示するものである。新聞や文学作品などに用いられる数多くの生きた表現をもとに、日本語の様々な興味深い表現において「なぜこの形式によってこの意味が表されるのか」という事情について、表現の背後にある認知の働きに注目する立場から明快な説明が示されている。

上掲の2冊には、認知言語学に馴染みのある読者には既知の情報も少なからず含まれるであろう。ただし、豊富な言語事例に基づき、日英語の表現について体系的に、多角的に論じる両者は、認知言語学に通じる読者にも有益な学びを与えてくれる。これらに対し、より特定の表現に関する研究として、3つめに吉村公宏『英語中間構文の研究』（ひつじ書房）を挙げたい。同書は英語の中間構文について、認知言語学の意味・文法・構文観を結集して論じるものである。言語表現の成立と発達に関わる史的・社会的側面にも目を向け、「属性」概念の認知的基盤、また2通りの「主体化」について示したうえで、「主客合一的な認識モード」から中間構文を特徴づけている。認知言語学的知見を総合し、中間構文の実態と成立基盤について1つの包括的な見方を提案する本書は、研究の深化と議論の拡大の両面で、中間構文の研究、そして言語表現の形と意味の結びつきに関する研究に大きな貢献を果たすものと期待される。

以上に加え、上掲の各書とは別の形で「認知言語学の総合力」を示す文献として、米倉よう子・山本修・浅井良策（編）『ことばから心へー認知の深淵ー』（開拓社）と松本曜教授還暦記念論文集刊行会（編）『認知言語学の羽ばたきー実証性の高い言語研究を目指してー』（開拓社）という2冊の記念論文集を挙げておきたい。認知言語学の観点から、様々な表現に関し、興味深い議論が展開されている。（大阪大学）

【表現学関連分野の研究動向】

修辞学

森 雄一

修辞学の分野では今期も比喩研究が盛んであった。そのなかでも新しい視点の研究として注目されるべきものに①岡本雅史「直喩標識としての「じゃないけど」—談話における直喩とアナロジーの再考に向けて—」(『日本認知言語学会論文集』20)がある。否定的直喩標識に着目することで、アナロジーの否定的側面をクローズアップし、それが日常会話のなかでどのように用いられているか観察している。談話において、否定的直喩標識と通常の直喩標識を重ねて用いることで段階的なフレーミングが行われている場合があることやヘッジ表現との連続性があること等興味深い指摘が多くなされ、今後の展開が期待される論となっている。②菊地礼「文法形式と比喩の関係—知覚動詞を用いた直喩について—」(『国立国語研究所論集』19)は、知覚動詞が直喩として用いられる条件について用例の丁寧な観察から導いている。中村明氏の研究以来、日本語の直喩標識の多様性は意識されてきたが、①②いずれも直喩標識においては周辺的と見られてきたものを扱った開拓的な研究となっており、隠喩の影に隠れがちな直喩研究がこのような形で展開するのは望ましいことである。夥しい蓄積がある隠喩論においても③谷口一美「身体部位詞の比喩的用法にみられる身体経験と仮想性」(『ことばから心へ 認知の深淵』開拓社)は今期の重要な成果である。身体経験をもとにしない「先生は頭から湯気を出していた」、「彼はいつも部長に尻尾を振っている」といった隠喩を扱い、前者は「キャリアオーバー」(ターゲット中に存在しない、あるいは顕著でないベース中の要素をターゲットに移す)から、後者は2つの入力スペースの融合という観点からそれぞれ論じている。アナロジーの「準抽象化理論」を提示した名著④鈴木宏昭『類似と思考 改訂版』(ちくま学芸文庫)が初版から大幅な改稿を経て出版されたのは大きな出来事であった。アナロジーをベースとターゲットとその2つを包摂するカテゴリー(抽象化)の3項構造でとらえ、その抽象化は、一般化された目標の達成に向けたものになっている等の制約がかかっているゆえに「準抽象化」であるとす。稿者なりの理解であるが、諺の持つ力が「準抽象化」の特質と重なりあうという観点(p.221)は極めて興味深いものであった。諺は表現学においても重要なトピックであるが、同書の延長線上に考えていくアプローチもあってよいと思われる。また、博士論文が書籍の形で出版されたものに⑤伊藤薫『修辞と文脈 レトリック理解のメカニズム』(京都大学学術出版会)があった。書名に見られるように文脈論から修辞現象をとらえる観点を提示し、山梨正明氏の修辞論を受け継いでいる。比喩以外の修辞現象を扱った好論として⑥水藤新子「めくるめく「雪国」変奏 文体はいかに模写されたか」(『ユリイカ』52—1)が特筆される。和田誠の「雪国」模写を題材に、多くの書き手の文体特質をジャンル、視点人物、レトリックの3つの観点からとらえ、模写(モジリ)論の今後の基本文献になるとともに、文体とはどのようなものかという大きなテーマにも示唆を与えてくれている。(成蹊大学)

【表現学関連分野の研究動向】

文章・談話研究

石黒 圭

日本語を中心とした言語研究は、70年代から90年代にかけて内省に基づく記述的文法研究が繁栄し、2000年以降はそれに代わってコーパスに基づく定量的語彙研究が席卷した。しかし、そうした研究動向も一段落した2020年、言語研究は新たな節目を迎えている。文章・談話研究も、接続詞を例にとると、内省的記述による接続類型の研究、コーパスを用いたジャンル別の接続詞の出現傾向の研究は過去のものとなり、新たな観点からの研究が増加している。ここではそれを三つに分けて紹介する。

一つ目は、接続詞の多様な機能に注目した研究である。井伊菜穂子「接続詞の接続領域の性質と認定基準」(『一橋大学国際教育交流センター紀要』2, pp.31-42)は、塚原鉄雄氏の機能領域の着想をもとに、接続詞の「どう」つなぐかではなく、「何を」つなぐかを対象に、分析方法を確立した点が斬新で、今後の発展が期待される。

また、井伊菜穂子・石黒圭「上級日本語学習者の接続詞「でも」の使用実態と困難点」は、国立国語研究所の『BTSJ 日本語自然会話コーパス』(宇佐美まゆみ氏構築)のシンポジウムの発表であるが、会話の接続詞が論理的機能よりも対人配慮的機能に基づいて用いられる点を実証しており、接続詞研究の新たな方向性を示している。

二つ目は、接続詞を新たな観点から捉えた研究である。李婷『日本語教育におけるメタ言語表現の研究』(ひつじ書房)は、佐久間まゆみ氏の接続表現の文脈展開機能と「段」の多重構造の枠組みに依拠して接続詞を論じている。接続詞をディスコース・マーカーではなくメタ言語表現として捉えた点で、新風を吹きこんでいる。

三つ目は、言語習得の観点から見た接続詞研究である。董芸「日本語学習者の作文における並列・継起の接続表現の習得」(『国立国語研究所論集』19, pp.127-138)は縦断学習者コーパスを用いて学習者の成長過程を捉えた点に特徴がある。並列・継起の接続表現が他の接続類型とは異なり、複文⇒連文ではなく、連文⇒複文の習得順序になることを明らかにした点が興味深い。

また、石黒圭「授業活動として行う日本語学習者の読解」(野田尚史編『日本語学習者の読解過程』pp.225-244, ココ出版)は、ピア・リーディング授業において文章にどのような接続詞を入れるのが適切か、学習者が自ら考えた答えをグループ内で対話させ、接続詞をメタ認知させることで接続詞の用法が身につくことを論じている。

このように2020年の文章・談話研究における接続詞研究は、内省による記述研究、コーパスによる定量研究といった確立した方法論に基づかず、多様なアプローチの競演による、いわば総花的な様相を呈している。今後も、多角的な手法によって言語の実態が明らかにされる研究の増加が予想され、言語研究の多様化の時代のなかで、文章・談話研究がさらに盛んになることを期待したい。

(国立国語研究所)